

二〇二四年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から , 2 ページから 18 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

死んだらどうなるのだろうかという問いは、宗教にとって重大です。宗教の主な役割の一つは、死に対する人類共通の不安を和らげることだとも言えるでしょう。

哲学者たちも、それを語っていますが、違いは、死後の天国や地獄の様子について語るのではなくて、そもそも「死後」というものがありうるのかどうかを問います。そして①驚くべきことに、現在に至るまでのほとんどの哲学者たちは、魂が肉体と共に滅びるといふ世界観に対して、何らかの疑問を投げかけています。

宗教は人の生死に関係します。多くの宗教は、人間がどこから来てどこへ行くのかを語ります。人間とは本来何であるのか。日々の暮らしに追いついて立っていられている今のあなたは、その本来の姿に比べてどうであるのか。そして、あなたは死んだ後にどうなるのか。宗教は、このような物語を積極的に語ってきました。その結果でしょうか、私たちが漠然と考える死は、たんに生物的な、主要器官の機能停止ということよりも、豊かで複雑な内容を持つに至りました。そのように複雑な死は、長い歴史の中で、人々の宗教的思考の中で育まれてきたものです。私たちは、知らず識らずのうちに、それを受け入れ、当たり前なものに見なし、そうして作られた②人生という物語の中で、生と死を考えています。

たとえば、私たちが人生について考えようとするとき、必ず死の理解を前提にします。死とは何かが曖昧であれば、死によって区切られるはずの生について深く考えることはできません。ところが、死の意味を理解するためには、必ず、何らかの物語を前提にしていなければなりません。そしてそのような物語の成立には、多かれ少なかれ、あるいは肯定的にせよ否定的にせよ、常に何らかの宗教が関係しています。私たちは宗教を前提に置かなければ、自分の人生についてすら考えることができません。

現代の常識的な理解として、死とはどのようなものか、死んだらどうなるのかという問いに対しては、大きく分けて四つの答え

方があると思います。

一つは、死んだらすべて終わりだとするもので、この考え方は、宗教の側からは無神論やニヒリズム、唯物論などという③冷たい呼称で呼ばれてきました。すべてが自然科学によって説明できると考える物理主義や自然主義と言われる立場もまた、霊や死後の世界が自然科学の対象でないという理由で、この立場に近いと思われます。現代は科学の時代ですので、自覚がなくてもこのように考えている現代人は多いかもしれません。

二つ目は、輪廻転生という、私たち日本人にはなじみ深い仏教やヒンドゥー教のもとにある世界観です。死とは、この身体の中に生まれたこの生の終わりであって、この身体が減びると、次の身体の中に転生すると考えます。その身体は、人間であるとは限らず、この世での行いに応じて、人間以上の天（天使？）に生まれるかもしれないし、あるいは、畜生と言われる人間以下の動物に生まれるかもしれないというわけですから、考えようによってはなかなかキビシイ世界観です。仏教では、そのような輪廻から脱出する、つまり解脱することを目指して、さまざまな教説が生まれました。

三つ目は、この世の最後の日に下される審判によって、天国や地獄に行くという、キリスト教やイスラム教に代表される考え方です。仏教でも浄土教の系統は、極楽浄土という天国のようなところに行くそうですので、こちらの考え方に近いかもしれません。どちらも、個人の努力というよりは、救世主の愛や如来の慈悲を信じることによって地獄行きを免れるという考え方なので、

「④」世界観、たとえば全知全能の創造神といったものを必要とします。じっさい、キリスト教の神はそのような神の典型ですし、阿弥陀如来も、一切衆生の救済を願う仏とされますから、強大な力をもつ人格神（如来）と言っていいでしょう。

四つ目は、魂それ自体は不滅であって、次の身体に転生もせず、天国にも地獄にも行かず、この世とは違うところ、あるいはこの世を構成しているいくつかの次元の一つに残り続けるという考え方です。こちらの方は、理屈が好きな哲学者が好む考え方ですね。精神と肉体、心と体の関係について考えることに集中するので、それ以上の大きな世界観にまで話を進めることは稀です。ですから、死後に残存する魂がその後どうなるのかについては、キリスト教などの既存の宗教に接続することが多いようです。

「魂たましいの存在は証明した。あとは宗教に任せる！」といったところでしょうか。

ところで、この四つは、それぞれが独立した四つの陣営じんえいと言うよりは、一つ目と、それ以外の三つの二つの陣営じんえいに大きく分かれます。なぜなら、一つ目以外の答え方は、すべて、身体が滅ほろびても、魂たましいや心や霊れいと呼ばれる何らかのものが、何らかのしかたで残ることを前提としているからです。

ですから本書では、一つ目以外の三つの考え方をひとまとめにして、「魂たましいの不死を主張する論」として扱あつかいたいと思います。逆に言えば、一つ目の、ニヒリズム、唯物論ゆいぶつろん、物理主義と呼ばれる立場が正しいかどうかということに、問題を絞しぼっていきたいと思います。

ドラマなどでよく、「あの世で先に待っているぞ」とか、「もうすぐおじいさんに会える」とか、「天国のあの人はきっと喜んでくれる」というセリフを聞くことがあります。そして、その意味が、なんとなくわかります。しかし、実際のところ、これはなにを言っているのでしょうか。

少なくとも、死んだら身体を焼いてしまうわけですから、このような発言の背後には、身体とは違ちがう何かがあるという考え方があはずです。一般いっぱんにそれを「魂たましい」と呼びます。「⑤ 「人間は身体と魂たましいからできていて、身体が滅ほろんだ後も、魂たましいは一緒いっしょに滅ほろびることがなく、何らかのかたちで残ると考えられているわけです。」

このときに前提になっている考えを、哲学ていがくでは「心身二元論」と呼びます。ちょうど、卵に白身と黄身があるように、かりに人間が心と身体という二つのものから成り立っているとすれば、死後の世界についての⑥このような言い回しを、かなりすっきりと理解することができます。

逆に、もし人間が主としてタンパク質からできた精巧せいこうなロボットであり、魂たましいや心と言われるものもすべては大腦などの身体の器官によって説明できると考えるなら、「死とは身体が壊こわれることである」で話はすべて終わり、死後の世界について語ることはで

きません。もちろん、自分が死んだあとのこの世界、たとえば千年後のこの世界について語ることはできませんが、それはここで問題にしている、⑦宗教的物語としての死後の世界ではありません。

ですから、「あの世」や「祖先の霊」などについて語りそれを理解するためには、人間は身体だけでなく魂を持っている、という主張を受け入れる必要があります。この、「魂」というものを、「身体」とは別の存在として理解することが、次に示すような宗教的物語が成立するための重要な要素となるでしょう。

人間は、身体の滅びによって死を迎える。しかしこのとき、心は身体と運命をともにしない。心はタンパク質を主とした有機物の塊ではなく、何か霊のようなものである。この霊としての心は、身体が滅びるとき、いわば身体を離れ、身体から抜け出て、どこかへ去る。去っていく先は、「あの世」である。身体がなくなると、心はあの世へ行く。この意味で、心が身体から離れてあの世へ去ること、これが「死」と呼ばれている事態の真相である。

こう考えれば、先に見た、いろんな言い回しがよく理解できます。「あの世」とは、身体から離れた心が向かっていく、この世ではない場所であり、そこで「先に待っている」のは、霊となった心です。また、これまでに死んだ人々の心も、同じように霊となって「あの世」にいるのですから、死ねば、「死んだおじいさん」つまり、あの世に存在しているおじいさんの心に「会う」こともできるでしょう。

あるいは、この世で何かめでたいことが起こると、「死んだ人が天国で喜んでいる」と言ったりしますが、この場合も、死んだ人の霊が、天国という一種の「あの世」に存在していると考えるならば、十分に理解可能です。もつとも、この言い回しが理解されるためには、「あの世」から「この世」を見ることができるということ、更には、「喜び」といった感情が、身体を持たない心にも感じられるということなどが、更に前提になります。しかしともかく、心が身体を離れてありうるならば、このような宗教的な物

語が本当である余地がありません。

ですから問題は、本当に、人間には「心」や「魂」や「霊」と言われるものが、「体」や「身体」や「肉体」と言われるものと別のものなのか、ということになります。

(『神さまと神はどう違うのか?』 上枝 美典)

問一 —線①「驚くべきことに」とありますが、どういう点で「驚き」だと表現しているのですか。考えられる説明として最も

適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類が共通して持つ「死」への恐怖は、哲学者たちの大半が考えても和らぐことがなかったという点。

イ 一般的にはどんな様子かが気になるはずなのに、哲学者は「死後の世界」が存在するか否かに固執している点。

ウ 死後「魂」が存在しないという考え方もあるのに、ほぼ全ての哲学者が死後も「魂」が残ることを前提としている点。

エ 多くの哲学者たちがよってたかって「死後の世界」について考えているにもかかわらず、未だ答えがわかっていない点。

オ 宗教も哲学も「人間とは何か」について議論する中で、人々の中に自然と宗教的思考が根付いていった点。

問二 —線②「人生という物語」とありますが、ここで言う「人生という物語」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普段の自分の行いが、信仰している宗教の教義にふさわしいかどうかを判断する基準になるもの。

イ 卒業、就職、結婚などの人生の節目において、勇気をもって一歩踏み出すきっかけをくれるもの。

ウ 万人に等しく訪れる「死」への恐怖から逃げるため、「生」のこのみを語ろうとするもの。

エ 人が生まれてからやがて死ぬことについて自分なりの意味を見出し、それを言語化してきたもの。

オ 自分が主人公となって世界が動いているかのように身の回りの出来事を説明したもの。

問三 ―線③「冷たい呼称」とありますが、「冷たい」という表現を文脈に合わせて言い換えた時に、最も適当な表現を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 皮肉な イ 未熟な ウ 無機質な エ 残酷な オ 俯瞰的な

問四 空らん「④」に入る言葉として最も適当だと考えられるものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 物語性の強い壮大な イ 物語性の弱い貧相な ウ 実現性の高いリアルな
エ 実現性の低い空想的な オ 精神性の高い高尚な カ 精神性の低い低俗な

問五 空らん「⑤」に入る言葉として最も適当だと考えられるものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア しかし イ つまり ウ ところで エ あるいは オ まして

問六 ―線⑥「このような言い回し」とありますが、これが指す部分を本文中から六十字以内で探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問七 ―線⑦「宗教的物語としての死後の世界」とありますが、これについて(1)と(2)に答えなさい。

(1) 「死後の世界」を具体的に言い換えた部分を本文中から二十五字で探し、最初の五字を抜き出ささい。

(2) この「死後の世界」を信じている人だけが理解できることとして当てはまらないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先祖代々受け継いでいる着物を着た時に、ご先祖様に守られていると感じる。

イ まるで前世からの縁のように、出会った瞬間から互いに惹かれあい恋に落ちる。

ウ 戦国時代から数百年が経っても城跡に行けば、武将の威厳を得たように感じる。

エ 長年連れ添った妻に先立たれた老人が、「死んだ妻に怒られるから」と節制する。

オ 大病を患っている人が、臓器移植手術を受けて元気に生きられるよう期待する。

問八 波線部「魂の不死を主張する論」とありますが、これによってどのようなことが可能になりますか。この論の説明をしな
がら七十五字以内で答えなさい。

三 次の【文章Ⅰ】および【文章Ⅱ】を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

【文章Ⅰ】

成瀬なるせあかりは幼少期から様々な挑戦ちょうせんをしてきていた。成瀬なるせと同じマンションに住む幼なじみで同級生の島崎しまざきみゆきは、「成瀬なるせあかり史を見届けたい」と思っており、成瀬なるせをずっと間近で見守り、ある時は成瀬なるせの挑戦ちょうせんに付き合ってきた。別の高校に進学してからも二人の親交は続いていたが、ある日島崎しまざきが大学進学と同時に東京へ引っ越すことを成瀬なるせに伝える。成瀬なるせは衝撃を受け、翌日は朝から何をしてもうまくいかない。家にも仕方がないと思い、成瀬なるせは公園に出かける。

島崎しまざきのことを思うとどうもAカンシヨウ的になってしまう。ブランコを降りて公園を出ると、向こうの方からトートバッグを提さげた大貫おおぬきが歩いてくるのが見えた。

「おう、大貫おおぬき」

声をかけると、大貫おおぬきは「なによ」と迷惑めいわくそうな顔をする。どうも嫌きらわれているらしいのだが、成瀬なるせは大貫おおぬきが嫌きらいではないため、遠慮えんりよする道理はない。

「数学の問題が解けなくて困っているんだ。何かいい方法はないだろうか」

成瀬なるせにとって喫緊きつじんの課題だ。大貫おおぬきは勉強熱心だし、いい解決法を知っているだろう。

「どういうこと？」

*
「京大の入試問題を見ても解法が浮かばなくなったんだ」

大貫おおぬきは呆あきれたように息を吐はく。

「教科書の例題でもやってみたら？」

①意表をついた答えだった。教科書の範囲はとくに終わっている。授業では問題集をメインに使っていたこともあって、もはや表紙のデザインすら思い出せない。どこにしまったらどうかと考えていると、大貫は「それと、髪切ったほうがいいんじゃない？」と続けた。

「しかし、大貫が切らないほうがいいと言ったじゃないか」

「あのときはそう思ったけど、さすがに今は変っていうか……」

やはり大貫は何かが違う。面と向かってこんなことを言ってくれるのは大貫しかない。

「大貫はこの美容院に行っているんだ？」

大貫は高校に入って髪型が変わった。中学時代はうねったひとつ結びだったのに、今ではまっすぐ髪を下ろしている。腕のいい美容師に切ってもらっているのだろう。

「別にどこだっていいでしょ。そのプラージュで切ったら？」

大貫は吐き捨てるように言うと、足早に去っていった。

髪を切って気分転換すれば勉強も捗るかもしれない。成瀬は馬場公園から徒歩一分のプラージュに足を踏み入れた。中には十席以上あり、思いのほか多くの人がいる。勝手がわからず立ち止まっていると、「八番へどうぞ」と案内された。

担当の美容師はいかにもおしゃべりが好きそうな中年女性だった。「これ、ずっと伸ばしてはったん？」と軽い調子で尋ねてくる。

「大事なことを忘れていた。すまないが、メジャーを貸してほしい」

検証のためスキンヘッドから伸ばしていたことを伝えると、美容師は「ほな測らなあかんわ」と興味を示してメジャーを持ってきた。

「トップは三十センチで、サイドは三十一センチぐらいやね」

②一ヶ月に一センチ伸びるといふ説どおりなら二十八センチのはずだが、それより少し長い。サイドの方が伸びやすいのも発見だった。

「若いから伸びるのが早いんやね。ほんで、どれぐらい切りましょ？」

肩を超えたあたりで切りそろえ、前髪を作ってもらうと、部屋のカーテンを取り替えたときのように気持ちがよかった。カット代金を支払い、家に帰る。

数学の教科書は使用済み問題集と一緒に積んであった。開きぐせもなく、あまり使っていなかったことが見て取れる。ぱらぱらめくってみると、項目ごとに例題が配置されていた。

成瀬は数学Ⅰの「数と式」から順番に、ノートに写して解きはじめてた。難易度が低く、リハビリにはちょうどいい。解いているうちにリズムに乗ってきて、③指先まで血が通うような感覚があった。

数学Ⅰの教科書を終えたところでBフイに島崎のことを思い出した。スキンヘッドにしたときも見せに行ったことだし、今回も報告に行ったほうがいいだろう。

エレベーターを上がって島崎の家に行き、インターフォンで呼び出す。ドアを開けて成瀬の顔を見るなり、島崎は「えっ、髪切ったの？」と驚きの声を上げた。

「二十八ヶ月で、三十センチから三十一センチ伸びることがわかった」

④島崎の眉間にしわが寄る。

「卒業式まで伸ばすんじゃないかったの？」

成瀬も髪を切るつもりなんてなかった。大貫に変だから切ったほうがいいと言われ、たしかにそうだと思って美容院に行つたと説明した。

「切つたらまずかったのか？」

「まずくはないけど、ちよつとがっかりしたっていうか……」

島崎は不満そうだが、髪を切る切らないは個人の自由である。

「成瀬ってそういうところあるよね。お笑いの頂点を目指すって言っておきながら、四年でやめちゃうし」

「やってみないとわからないことはあるからな」

成瀬はそれで構わないと思っている。たくさん種をまいて、ひとつでも花が咲けばいい。花が咲かなかったとしても、挑戦した経験はすべて肥やしになる。

「今回も、髪を切らないと暑くて不格好になることがわかった。M^{*3}ーグランプリにしても、馬場公園で漫才を練習したこととときめき夏祭りの司会になった。決して無駄ではない」

「成瀬の言いたいことはわかるけどさ、なんかモヤモヤするんだよね。こっちは最後まで見届ける覚悟があるのに、勝手にやめちゃうから」

成瀬は背中に汗が伝うのを感じた。⑤振り返ると心当たりがありすぎる。成瀬が途中で諦めた種でも、島崎は花が咲くのを期待していたのかもしれない。これでは愛想を尽かされても無理はない。

「すまない、話はそれだけだ」

どうしていいかわからなくなった成瀬は、階段を駆け下りて家に帰った。

【文章口】

【文章口】は10ページ波線部「大貫が言った」にあたる場面の描写で、「わたし」とは成瀬と同じ高校に通う同級生の大貫かえでのことである。大貫と成瀬は一年生の夏、故郷の滋賀県大津市から出て東京大学（東大）の見学に来ていた。成瀬から行きたい場所があると誘われた大貫はしぶしぶ成瀬と東大を出て、池袋の西武デパートに着く。

店に入ると、初めて来たはずなのに懐かしさを覚えた。*4 西武大津店とはテナントも品揃えも全然違*5うのちがに、館内の空気が西武なのだ。成瀬は目に涙を浮かべている。ずいぶん大げさだと笑いたくなるが、わたしの胸にもこみあげるものがあって、うまく言葉が出てこない。

「地上に行つて、外から見てみよう」

エスカレーターまでたどり着くにも人をよけて歩かなければならない。西武大津店がいつもガラガラだったことを思い出す。店の外に出たら、自分が小さくなったような錯覚に陥おちいった。西武池袋本店は巨大で、わたしの考えるデパートの五軒分ぐらごけんぶんいはあった。西武大津店の一階の端で営業していた無印良品*6だけで一つのビルになっている。「池袋駅東口」と書かれた入口もあるが、こういう構造になっているのだろう。

また成瀬から写真を撮るよう頼まれ、わたしを道連れにしたのはカメラマンにするためだったのだと悟さとる。なんだか腹立たしくなり、「わたしの写真も撮とってよ」とスマホを渡した。成瀬の撮とった写真はわたしの姿とSEIBUのロゴがちゃんと収まっている以外、特筆すべき箇所はなかった。

「本店はすごいな。もはやデパートと言うより街だな」

成瀬は興味深そうにいろんな角度から写真を撮っている。

「わたしは将来、大津にデパートを建てようと思ってるんだ」

⑥こんなふうに目標とも夢とも野望ともつかないことを気安く口に出せたらどんなに楽だろう。あの寂れた街にデパートを出店するのはさすがに無茶だと思うが、わたしが反論したところで成瀬が考えを改めるはずがない。

「今日はそのための視察？」

わたしが尋ねると、成瀬は「そうだ」とC満足まんじつ気に答えた。

東大＊ワに戻る地下鉄の中で、わたしは成瀬なるせに「どうして坊主ぼうずにしたの？」と尋ねた。成瀬なるせは意外そうな表情でベリーショートベリーショートの髪かみに触れる。

「はじめて訊かれたな。みんな訊きづらいだろうか」

「そりゃ訊きづらいでしょ」

反応を見るに、深刻な事情があるわけではないらしい。

「人間の髪かみは一ヶ月に一センチ伸びると言うだろう。その実験だ」

意味がよくわからず黙っていると、成瀬なるせが続けた。

「入学前の四月一日に全部剃ったから、三月一日の卒業式には三十五センチになっているのか、検証しようと思ったんだ」

わたしは思わず噴き出した。小学生の頃、朝礼台あされいだいに上る成瀬なるせの肩かたまで伸びる直毛ちくもうを見て、わたしもあんな髪かみだったらよかったのにと羨んだのは一度や二度じゃない。

「全部剃らなくても、ある時点での長さを測っておいて、差を計算したらよくない？」

わたしだって縮毛矯正きようせいしたことで、地毛ぢもうが伸びるスピードがわかった。

「ちゃんと厳密にやりたかったんだ。それに、美容院に行くと、内側と外側で長さを変えられてしまうだろう。全体を同時に伸ばしたらどうなるか、気にならないか？」

一瞬間得したが、同意するのは悔しくて「そうだね」と軽く答える。

「しかし短髪たんぱつが想像以上に快適で、伸ばすのが面倒めんどうになってきている」

成瀬なるせは頭頂部の髪かみをつまんで言った。

「せっかく剃ったんだから、最後までちゃんとやんなよ」

また憎まれ口にくぐちを叩いてしまったが、⑦成瀬なるせは真顔まおんで「大貫おほぬきの言うとおりだな」とうなずいた。

(注)

- *1 京大——京都大学の略称。リヤクシヨウ
 - *2 プラージュ——美容院の店名。
 - *3 M—1グランプリ——お笑いのコンテスト。漫才を競い合う。成瀬は島崎を誘ってこのコンテストに出場したことがある。まんざい
 - *4 西武大津店——成瀬や大貫の故郷にあったデパート。成瀬が中学二年生の夏に閉店した。おおつ
 - *5 テナント——建物に入っている店舗。てんぼ
 - *6 無印良品——衣服、生活雑貨、食品などを扱う店舗。あつか
 - *7 東大に戻る——二人はこの後、模擬授業を受けに大学へ戻る予定だった。もど
- 問一 —線①「意表をついた答え」とありますが、ここでのやりとりからわかる成瀬と大貫それぞれの状況を説明したものと
して最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 大貫は成瀬にいやな思いをさせることをわざと言っているが、成瀬には大貫の悪意は伝わっていない。おおぬき
 - イ 大貫は成瀬に最低限の応対をしようとしているが、成瀬はその大貫の努力よりも発言内容そのものを評価している。おおぬき
 - ウ 大貫は成瀬にぶっきらぼうに話しているが、成瀬は大貫の言葉を素直に受け止めており大貫の態度を気にしていない。おおぬき
 - エ 大貫は成瀬をおとしいれようとしてわざと誤った提案をしたが、成瀬は大貫の提案を正当なものだと思っている。おおぬき
 - オ 大貫は成瀬をぞんざいに扱っているが、成瀬は大貫の対応を真面目に受け止め自分の行動の未熟さを反省している。おおぬき

問二 ―線②「一ヶ月に少し長い」とありますが、ここから【文章】は成瀬が何年生の何月の時の話だとわかりますか。【文章

□】の成瀬と大貫との会話も参考にしながら、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二年生の六月 イ 二年生の七月 ウ 三年生の八月 エ 三年生の九月 オ 三年生の十月

問三 ―線③「指先まで血が通うような感覚」とありますが、ここでの成瀬の状況を説明したものととして最も適当なものを次の

ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 気持ちを切りかえ、いつもの勉強の感覚を取り戻している。

イ 大貫の助言のおかげで、不調を乗り越えられたことに感謝している。

ウ 島崎との別れのさみしさを克服し、前向きになっている。

エ 京大ではなく、島崎と一緒に東京の大学に行こうと決意している。

オ 大貫や美容師との交流を経て、人としての温かさを回復している。

問四 ―線④「島崎の眉間にしわが寄る」とありますが、ここでの島崎の心情を説明したものととして最も適当なものを次のア～オ

の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 成瀬が髪を伸ばし続けた自身の格好を気にしていたことに驚いている。

イ 成瀬が伸ばし続けていた髪を切ってしまったことに不可解な思っている。

ウ 成瀬が島崎の期待に応えるよりも快適さを優先したことに失望している。

エ 成瀬が勝手に島崎にことわりもなく髪を切ったことに不愉快な思っている。

オ 成瀬が自身の挑戦よりも大貫の提案を尊重したことに嫉妬している。

問五 ―線⑤「振り返ると心当たりがありすぎる」とありますが、これは成瀬が何をしてきたという「心当たり」ですか。六十字

以内で説明しなさい。

問六 ー線⑥「こんなふうにく楽だろう」とありますが、この一文から読み取れることとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大貫は、将来に安定を求めており、野望など持っても意味がないと切り捨てている。

イ 大貫は、常に完璧を求め、自分にできない挑戦はしないうちから諦めてしまう。

ウ 大貫は、失敗を恐れているので、将来のためには注意を重ねて計画を立てている。

エ 大貫は、周りの視線を気にしており、夢や希望を気軽に言うことためらいを抱いている。

オ 大貫は、現実を悲観するあまりに、自由にのびのびと夢を描くことができている。

問七 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】から読み取れる、大貫の成瀬への思いとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分まで変な人だと思われるたくないので、成瀬のようになりたいとまでは思わないが、一方で成瀬の実力は認めており、成瀬を良きライバルであるとも思っている。

イ 成瀬は自分に対して興味を持っていないと思っており、そのさみしさからつい成瀬に冷たくあたってしまうが、実は成瀬の挑戦の行く末をひそかに楽しみにしている。

ウ 周囲からの評価を気にしていない成瀬の性格に理解を示す一方で、難関大学志望やデパート建設などといった大それた夢を軽々しく語る成瀬を幼いと思下している。

エ 常識外れな言動を迷惑だと思いつつも、他人からどう思われているかを一切気にしない成瀬にあこがれており、成瀬が困ったときには力になりたいと思っている。

オ 型破りな言動で目立つ成瀬とはできるだけ関わりたくないと思うが、一方で確固たる自分の考えを持ち、常識にとらわれず自由にふるまう姿をうらやましく思っている。

問八 ー線⑦「成瀬なるせは真顔まへんで」とありますが、ここで成瀬なるせはどのようなことを思っていたと考えられますか。【文章】から答えとなる二文続きの箇所かしょを探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問九 ー線A「カンショウ」・B「ファイ」・C「満足気」について、以下のそれぞれの問いに答えなさい。

(1) ー線A「カンショウ」の「ショウ」に相当する漢字をふくむものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 道路で転んで足をフショウする。

イ ステージのショウメイをつける。

ウ 今でもインショウに残っている風景。

エ 一位になったのでショウジョウをもらう。

オ キショウあらかれの荒い彼とはすぐけんかになる。

(2) ー線B「ファイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいにはつきりと書くこと。送り仮名がなが必要な場合、それも解答らんに書きなさい。)

(3) ー線C「満足気」の正しい読みがなをひらがなで書きなさい。

